私が「研究」と称して
してきたこと

西嶋 義憲

退職記念研究会（最終講義）
2023年3月9日(木) 14:00-15:00
金沢大学人社2号館3階第1会議室

目次

１．　３つの分野
1.1. 社会言語学的研究
1.2. 語彙意味論的研究
1.3. テクスト言語学的研究
２．　それぞれの分野で何をしたのか
３．　今後の研究計画

１．３つの分野

1.1. 社会言語学的研究

- コミュニケーション行動制御表現
- 言語景観
- アジアとEUにおけるドイツ語

1.2. 語彙意味論的研究

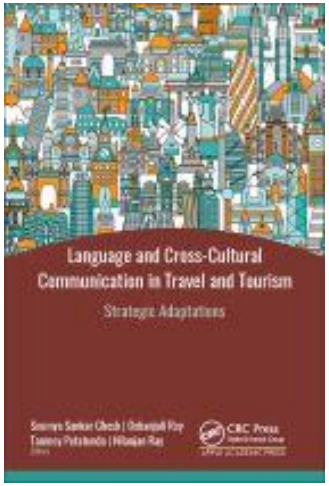
- コミュニケーション行動評価概念
- 労働言葉

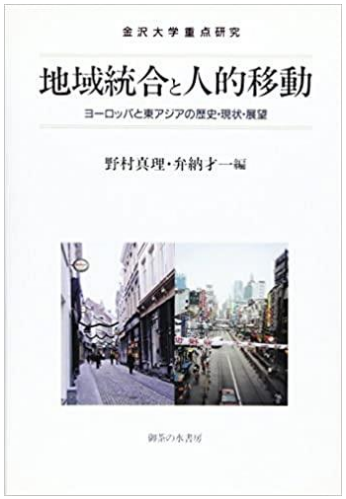
1.3. テクスト言語学的研究

- 対照文体論
- カフカのテクスト分析

2. それぞれの分野で何をしたのか
2.1. 社会言語学的研究

2.1.1. コミュニケーション行動制御表現
2.1.2. 言語景観
2.1.3. アジアとEUにおけるドイツ語





2. 1.　社会言語学的研究

2.1.1. コミュニケーション行動制御表現

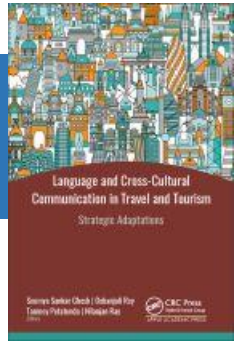
日独の同じ場面で何をどう言うか（しつけ言葉）
ある経験「“Ohne Absicht”だとぉ？ほかに言うことないんかい？」
（わざとじゃない）

【公園で】
「あぶない」と「Vorsicht」「Halt」
cf.「うるさい」と「Ruhe!」、「聞こえません」と「Lauter bitte!」
ステッカーも？

【自宅にやってきた友達と自分の子供がけんかを始めたとしたら】
「仲よく遊びなさい」「じゅんばんこでね」
「Einigt euch bitte, wer damit spielen darf!」（どっちが遊ぶか話し合って）
「Mach das bitte mit deinem Freund aus!」（友達と話し合って）

【自分の子供が別の小さな子にぶつかって泣かしてしまったとしたら】
保護者の直接介入
日本人 (28.6% (22/77)) *　vs. ドイツ人 (10.7% (6/56))
保護者の直接謝罪
日本人 (22.1% (17/77)) ** vs. ドイツ人 (1.8% (1/56))
有意差 $^{**}p < .01$; $^{*}p < .05$　　cf. 当事者性(迎え場面)

2. 1. 社会言語学的研究



2.1.2. 言語景観

2.1.2.1. 言語間比較と文芸作品

言語間比較に文芸作品の翻訳を使う例（池上(2000)など）

1) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。（川端康成『雪国』）
2) The train came out of the long tunnel into the snow country.
   (汽車は長いトンネルを抜けて雪国に入った) (E.G. Seidensticker訳)
3) Als der Zug aus dem langen Grenztunnel herauskroch, lag das »Schneeland« vor ihm weit ausgebreitet. (O. Benl訳)
   (汽車が長い国境のトンネルから出たとき、汽車の前方に雪国が広がっていた)
4) Jenseits des langen Tunnels erschien das Schneeland. (T. Cheung訳)
   (長いトンネルの向こうに雪国が現れた)

「主観的把握」と「客観的把握」

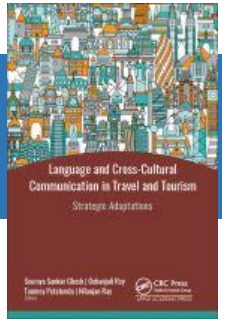
1) 主人公（＝語り手）の体験したことをそのまま表現（主観的把握）

2), 3), 4) 語り手が情景（物語世界）を外側から描写（客観的把握）

cf. 人称制限/言語相対論

翻訳は言語間比較に使えるか？ 文芸作品の翻訳は訳者の主観や文体が影響

2.1. 社会言語学的研究

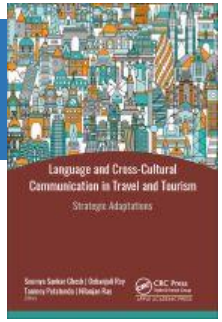


2.1.2. 言語景観

2.1.2.2. 多言語サインを利用した言語間比較

文芸作品の翻訳は言語間比較に使えそうにない。
ならば、街でよく目にする多言語サインはどうだろうか。

2. 1.　社会言語学的研究



2.1.2. 言語景観

単純な文法的な間違いもあるし

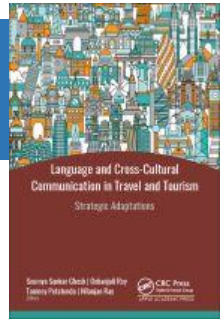
「蜂に、ご注意下さい。」

‖？

“Be careful of the bee”

（あの蜂、例の蜂、どんな蜂よ？）

2. 1.　社会言語学的研究

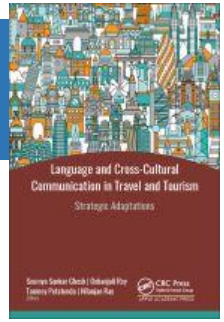


2.1.2. 言語景観

辞書的な直訳の問題もあるし

「品物損害クラーム」とは何か？
「手荷物受取所」なら分かるのに

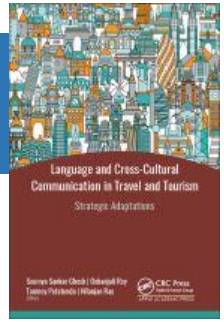
2. 1.　社会言語学的研究



2.1.2. 言語景観

語用論的（認知言語学的）な直訳の問題もあるし

2. 1.　社会言語学的研究



2.1.2. 言語景観

「歩道外立入禁止」

“Keep within the boundary fences.”

「柵の内側にとどまりなさい」/

「柵の内側から出てはいけません」

表現形成の視座の問題

参考：　「黄線の内側でお待ちください」

→ “Wait within / inside the yellow line.”?

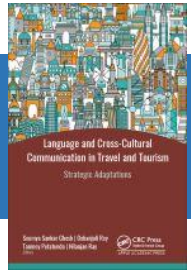
“Wait behind the yellow line.”

Cf. ハンドルの手前に座る

＝ to sit behind the steering wheel

「立入禁止」と「Keep out」

2. 1. 社会言語学的研究



2.1.2. 言語景観

多言語サインは言語間比較に不向き

→ 対応する場面で同一機能をもつ自然な表現どうしを比較すればいい

実際に対応する場面で使われる公共サインなら言語間比較に利用できるのでは？ たとえば、日本とドイツでは？

「つぎとまります」と「Wagen hält」（くるまが止まる）
「飲めません」と「Kein Trinkwasser」（飲み水ではない）

→ 日中（台湾語）仏独の比較を共同研究として実施中

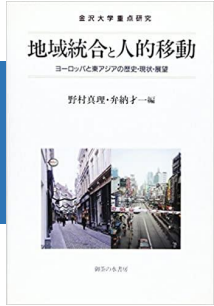
2. 1. 社会言語学的研究

2.1.3. アジアとEUにおけるドイツ語

ドイツ語受講者数の減少。初習言語としてのドイツ語履修登録者数と履修率の変化で確認（各年度とも前期のみ集計）。
2005年度(1734名: 40.7%); 2006年度(1001名: 39.0%); 2007年度(844名: 36.9%); 2008年度(733名: 37.7%); 2009年度(685名; 37.0%); 2010年度(581名: 32.4%); 2011年度(514名; 30.3%)。7年間で1700名から500名へ（約1/3）。

2005年度から2011年度にかけて受講者が激減：理系学部で初習言語非必修化ドイツ語の選択率についても、40%から30%まで下落。
1クラスの平均受講者数：2005年度は専任13名・非常勤講師14名の計27名で58コマ開講、初習言語のドイツ語受講者1734名：1クラス平均29.9名。
2011年度はその半数、専任8名・非常勤講師6名の計14名体制で28コマ開講、初習ドイツ語受講者514名に対応：1クラス平均18.4名。1クラス20名以下というのは語学教育では理想的。キンダイ（金沢大学）における英語以外の外国語学習の軽視とドイツ語選択の低迷により、ドイツ語教育では図らずも少人数クラスが実現。結果として質の高い授業を提供できる枠組み実現。
【参考】2022年度Q1(159名: 22.4%); ここ10年で3割に
　専任9名(内1名サバ)・非常勤講師3名(計11名で22コマ開講 1クラス7.2名)

2. 1. 社会言語学的研究



2.1.3. アジアとEUにおけるドイツ語

参考： 外国語使用の実情（2007年）

高校レベルの生徒

60％が2つ以上の外国語を学習

3分の1は1外国語のみ

6％は外国語を学んでいない

25歳から64歳までのEU市民

28％が 2つ以上の外国語を話し

36％は1つの外国語を話す

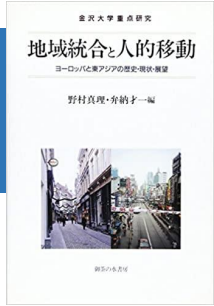
36％は外国語が1つも話せない

↓

36％が母語のみ。

ところが、その母語に問題を抱えている人たちも多い。

2. 1.　社会言語学的研究



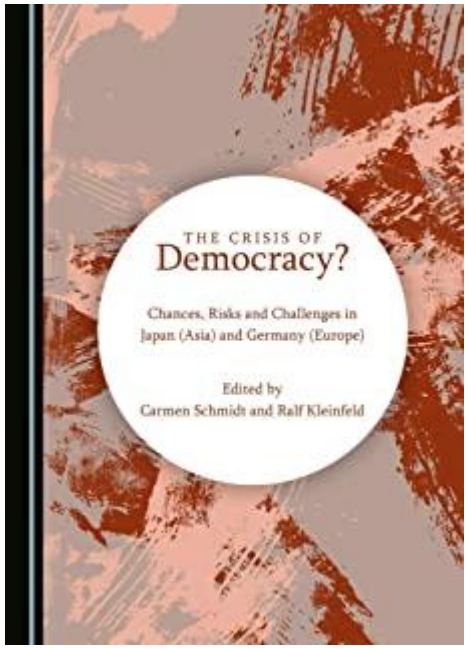
2.1.3. アジアとEUにおけるドイツ語

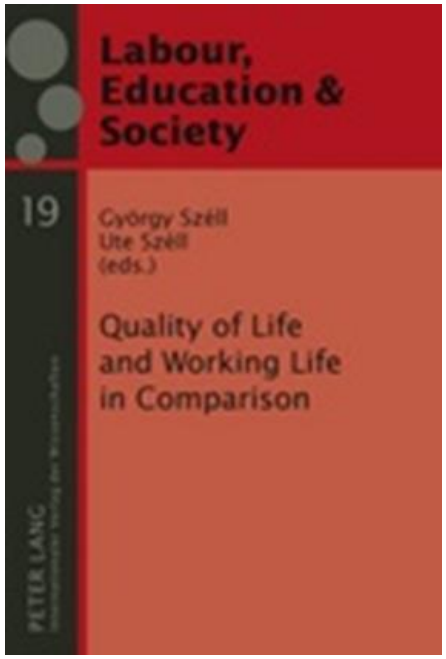
非識字者へのキャンペーン

400万人以上ものドイツ語母語話者が
正しく読み書きできない

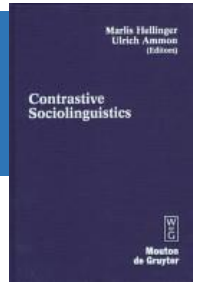
2. 2. 語彙意味論的研究

2.2.1. コミュニケーション行動評価概念
2.2.2. 労働言葉





2. 2. 語彙意味論的研究



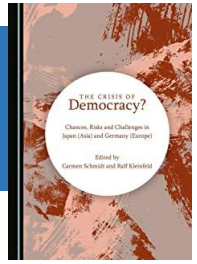
2.2.1. コミュニケーション行動評価概念

Table 1

	親友	同級生	教授
	to Person A (intimate)	to Person B (not intimate)	to Person C (socially distant)
ざっくばらん (1) *zakkubaran*	88.4	45.1	3.9
丁寧 (2) *teinei*	8.4	55.2	97.4
親しみ (3) *shitashimi*	75.0	50.3	22.5
礼儀正しく (4) *reigitadashiku*	8.4	50.3	99.4
気楽 (5) *kiraku*	96.1	52.9	13.8
わきまえ (6) *wakimae*	29.2	68.0	96.8
傷つけない (7) *kizutsukenai*	68.4	92.2	80.1
距離なく (8) *kyorinaku*	80.6	24.2	5.2

Yamashita (1996) / Marui *et al*. (1996: 390)

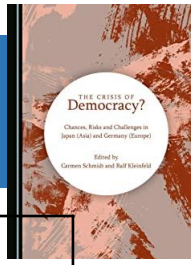
2. 2. 語彙意味論的研究



2.2.1. コミュニケーション行動評価概念

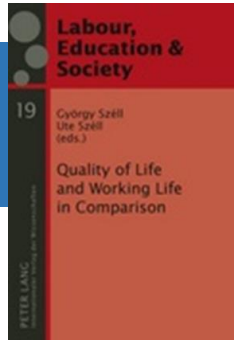
評価概念	親友 (親しい同年齢)	同級生 (親しくない同年齢)	教授 (親しくない 地位の差あり)
a) ざっくばらん (frank)	89.8 70.5 ↓**	45.1 22.1 ↓**	5.0 6.2
b) 丁寧 (polite)	10.6 27.0 ↑**	58.7 83.6 ↑**	97.8 97.9
c) 親しみ (friendly)	77.1 85.7 ↑*	52.7 63.1 ↑*	21.3 27.6
d) 礼儀正しく (conforming to norms)	9.4 19.7 ↑**	51.3 68.9 ↑**	99.1 98.8
e) 気楽 (easy)	96.9 95.1	53.6 46.3	12.6 9.5
f) わきまえ (knowing one's place)	33.8 40.6	71.4 73.0	96.9 98.4
g) 傷つけない (avoid causing injury)	70.4 80.7 ↑**	91.5 93.9	80.9 84.3
h) 距離なく (without distance)	79.2 85.2	23.7 30.3	5.4 10.7

2. 2. 語彙意味論的研究



評価概念	親友 (親しい同輩)	同級生 (親しくない同輩)	教授 (親しくない 地位に差あり)
a) *Offen* (‘ざっくばらん’)	95,0% 96,7%	37,5% 40,0%	27,5% 23,3%
b) *höflich* (‘丁寧’)	65,0% 33,3% ↓**	97,5% 96,7%	100,0% 100,0%
c) *freundlich* (‘親しみ’)	95,0% 80,0%	100,0% 100,0%	97,5% 96,7%
d) *gemäß den üblichen Umgangsformen* (‘礼儀正しく’)	27,5% 46,7%	95,0% 93,3%	95,0% 100,0%
e) *unverkrampft* (‘気楽に’)	100,0% 100,0%	45,0% 50,0%	20,0% 40,0%
f) *sich der sozialer Beziehung zu dem Partner bewußt* (‘わきまえ’)	62,5% 73,3%	70,0% 80,0%	90,0% 90,0%
g) *nicht kränkend* (‘傷つけない’)	70,0% 73,3%	87,5% 96,7%	92,5% 90,0%
h) *Ohne Distanz* (‘距離なく’)	75,0% 83,3%	10,0% 20,0%	0,0% 6,7%

2. 2. 語彙意味論的研究



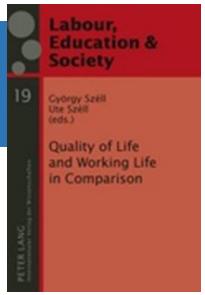
2.2.2. 労働言葉

(1) お忙しいところ，ご面倒をおかけして申し訳ありませんが，速やかなご回答をお願いいたします。
(2) お手すきの際で結構ですので，よろしくお願いいたします。

(3) Entschuldigung, dass ich Sie störe, während Sie beschäftigt sind, aber ich bitte Sie um Ihre sofortige Antwort.
(4) Es wäre Ihnen sehr dankbar, wenn Sie mir sofort darauf antworten würden.
(5) Im voraus danke ich Ihnen dafür, dass ich Ihre kostbare Zeit nehme.

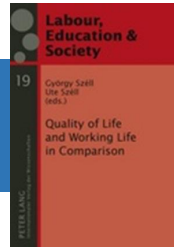
日独両言語の「働く」と「arbeiten」の語源的意味はまったく異なる。
ドイツ語の「arbeiten」の語源的記述は，中高・古高ドイツ語では，肉体を使った重労働，苦役と説明している。
日本語の「働く」のそれは，「からだを動かす。動く」ということである。
日本語では，単にからだを動かすことが、後に「仕事をする」の意味を獲得したことになる。

2. 2. 語彙意味論的研究



- 辞書記述を見る限り，日本とドイツの日常生活における労働に対する意識は異なる。すなわち，働くことは，日本では日常において当たり前の活動とみなされるが，ドイツではそうではない。
- この違いは，たとえば英語の「week day」に相当する日本語とドイツ語表現を比較すれば容易に理解できる。「week day」は日本語で「平日」と訳され，ドイツ語では「Werktag」（仕事日）と訳される。「平日」は「ふつうの日」という意味であり，その表現自体にはそこで何が行なわれるのか明示されていない。ところが，ドイツ語の「Werktag」は，働く日を意味し，語自体にこの日がどういう日であるのかが明示してある。この違いは示唆的である。「平日」という日本語表現によれば，働くことが当たり前であり，そのため，それについてあえて表現として言及する必要がないということになる。ところが，ドイツ語の「Werktag」という表現では働くことが表現自体に表わされていることから，働くことは特別な活動とみなされていると解釈できる。

2. 2. 2. 語彙意味論的研究

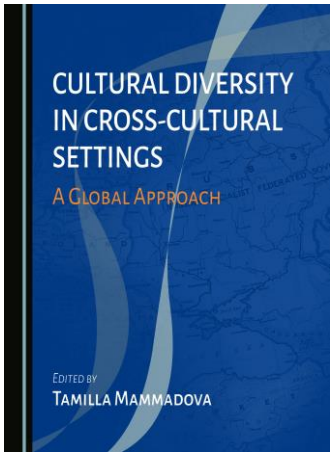


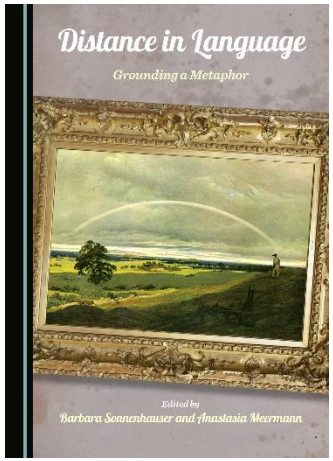
- 英語の「leisure」に関していえば，ドイツ語と日本語の対応語彙もかなり違っている。ドイツ語「Freizeit」の意味は働く必要のない時間のことである。この語の辞書説明では，基本的な意味を説明した後，その目的の一つを「Erholung」（体力気力の回復）として記述している。同様の説明は，「Ruhe」「Ferien」「Pause」「Urlaub」といった他の表現でも見ることができる。ところが，日本語の対応表現「余暇」の辞書記述には「仕事の合間のひま」，すなわち，継続する仕事の中断として記述され，その目的については言及されていない。他の関連する語彙「休み」「休憩」「休息」「ひま」についても同様である。

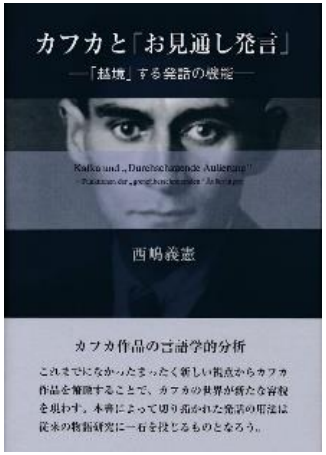
- 日本語とドイツ語では一週間に対する態度も異なる。それには二つの関心方向が区別される：(1) 休日志向と(2)労働志向である。英語の「five-day work」にあたる日本語とドイツ語はそれぞれ，「週休二日」と「Fünf-Tage-Woche」である。日本語の「週休二日」の背景には，働く事が当たり前なので，週にどのくらいの日数休めるかに関心がある。休日志向といえる。ところが，ドイツ語の「Fünf-Tage-Woche」は，働く事は当たり前ではなく，特別なこととみなされているので，週のうち何日働くのかに関心がある。したがって，労働志向に分類可能である。

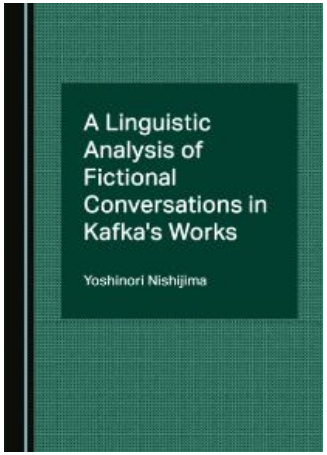
2. 3. テクスト言語学的研究

2.3.1. 対照文体論
2.3.2. カフカのテクスト分析

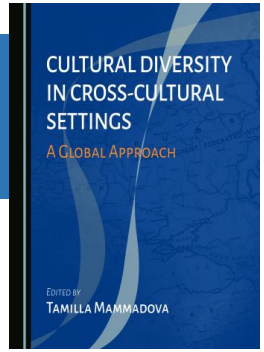








2. 3. テクスト言語学的研究



2.3.1. 対照文体論

新聞記事の比較: 共通の枠組み 5W1H / 6 W-Fragen
交通事故の記事の日独比較
日独両社会で発生する，内容的に比較可能な同じような種類の事件や事故としては，交通事故が挙げられる．交通事故は日独両社会で日常的に発生し，それが報道されているからである．交通事故はかなりの大事故でない限り，発生現場の地域との関連で，地方紙で取り上げられる．そこで，分析対象を地方紙とする．したがって，地方紙を材料に，そこで報道される同規模の交通事故を対象とする．日独それぞれ比較可能な交通事故の典型的な報道記事を取り上げ，比較を実施している．報道記事で慣用化されている5W1Hという枠組み内で，5W1H のどの項目に重点が置かれて記事が構成されているのかを比較する．

2. 3. テクスト言語学的研究

2.3.1. 対照文体論

日本の新聞記事（交通事故）
交通事故に関する日本の地方紙に載った記事を紹介する．
『京都新聞』(http://www.kyoto-np.co.jp/) の記事
「路線バスと乗用車が衝突，7 人重軽傷　京都・京田辺」
（2016 年7 月17 日付）を分析する．

いつ：「17 日午前8 時半ごろ」，**どこで**：「京田辺市大住の市道山手幹線で」，**誰が**：「近鉄新田辺駅行きの京阪バスと，同市大住ケ丘の女性会社員(51) の乗用車が」，**何をした**：「正面衝突した」，**どのように**：「肋骨（ろっこつ）を折り重傷」「軽傷」，**なぜ**：「乗用車がセンターラインを越えた」．

2. 3. テクスト言語学的研究

ドイツの*Freie Presse* (http://www.freiepresse.de/) に掲載された「Radfahrerund Bus stoßen zusammen（自転車とバスが衝突）」（2016 年8 月29 日付）を分析.

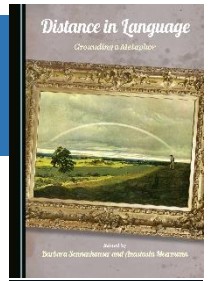
いつ：「vergangenen Freitagabend（先週の金曜の晩）」，**どこで**：「auf der lockenstraße nach Oelsnitz（エルスニッツ方面に向かうフロッケン通りで）」，**誰が**：「Radfahrer und Bus（ 自転車に乗っていた男性とバスが）」，**何をした**：「Der Radler pralltegegen die Frontscheibe des Busses（自転車の男性がバスのフロントガラスにぶつかった）」，**どのように**：「fuhr hinter diesen ein Linienbus, welchersich durch Hupen bemerkbar machte. In derFolge überholte dieser die Jugendlichen, dabeifuhren zwei Radfahrer nach rechts an denFahrbahnrand – der dritte allerdings nach links. Mit diesem 14-Jährigen kam es zur Kollision（3 人の後ろをバスが走っていた．そのバスはクラクションを鳴らしてその少年たちにバスに気づかせようとした．その後，バスは少年たちを追い越そうとした．その際，自転車に乗っていたうちの2 人は右によって車道の端を走った．ただし，もう1 人は左へよった．この14 歳の少年と衝突するにいたった）」「Dabei wurde der Jugendliche schwer verletzt. Ein Rettungshubschrauber brachte ihn insKrankenhaus. Der Sachschaden am Bus beträgtder Polizei zufolge 2500 Euro. Zum Schaden amFahrrad liegen keine Angaben vor.（その際，若者は重傷をおった．救助ヘリがその子を病院に搬送した．バスの物損は警察によると2 千5 百ユーロに達　する．自転車の損害については言明なし）」，**なぜ**：「Drei Jugendliche Fahrradfahrer fuhren vergangenen Freitagabend nebeneinander auf der　Flockenstraße nach Oelsnitz. 先週の金曜の晩，3 名の若者が自転車に乗り，横並びでフロッケン通りをエルスニッツ方面に走っていた）」

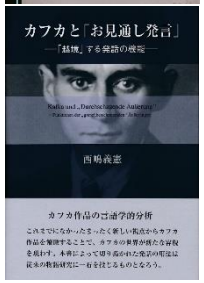
2. 3. テクスト言語学的研究

日本の新聞記事は，**5W1H の情報が型どおりに，しかもどの項目についても簡潔に記述**されているようだ．また，事故に関与した当事者の大まかな**住所，職業，性別，年齢，場合によっては実名**までもが記載されている．どこのどのような人物が何をしたのか，という観点から記事が書かれているように見える．

ドイツの新聞も，5W1H の情報は，日本の新聞と同様にすべて記載されている．しかし，その記載順に日本のような定型はなく，量に関しても，必ずしも均一でなく，**「どのように」と「なぜ」がより重点的**に記述されているように見える．すなわち，日本語の記事構成とは異なり，ドイツ語の記事では，とくに，**どうしてそうなったのか，その経緯を，また，どの程度なのかをより詳細に，具体的な損害額などを提示することにより明示している**．また，ドイツの記事では**当事者の性別や年齢**は記載されるが，日本の記事のように**住所や職業**に言及されることはない．これらのことから，ドイツの新聞記事は，事故について，「いつどこで誰が何をした」に関する情報とは別に，なぜどのようにしてそういう事態に至ったのか，**その経緯とその被害の程度に，より重点**を置く傾向が認められる．

2. 3. テクスト言語学的研究





2.3.2. カフカのテクスト分析

発話できない文（unspeakable sentence）？

(4) *Ich denke, dass mein Englisch sehr schlecht ist.*

“I think that my English is very poor.” （私の英語はとても下手だと思う）

(5) *Du denkst, dass mein Englsch sehr schlecht ist.*

“You think that my English is very poor.” （私の英語がとても下手だとあなたは思う）

文(4)と(5)は*denken* (think)という思考動詞を述語とする文で、それぞれ主語が１人称 *ich* と２人称 *du* である。どちらの文も文法的に正しい。しかしながら、文(5)は運用上、奇妙であるように見える。話者が本人にしか把握できないはずの対話相手の思考内容について直接に言明しているからである。

もちろん、たとえばつぎのような疑問文や推測する文なら、まったく問題ない。

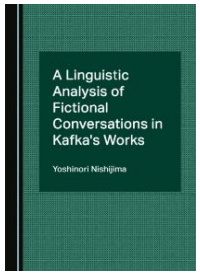
Denkst du, dass mein Englisch sehr schlecht ist?

“Do you think that my English is very poor?” （私の英語がとても下手だと思うか）

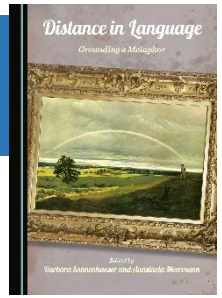
Du denkst wohl, dass mein Englisch sehr schlecht ist.

“You think probably that my English is very poor.”

（私の英語がとても下手だと思っているのだろう）



2. 3. テクスト言語学的研究



2.3.2. カフカのテクスト分析

問題提起

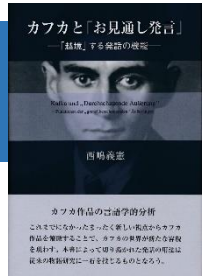
しかしながら、このような２人称を主語とする一見奇妙な文はフランツ・カフカの作品会話の中に散見される。その1例を『判決』（*Das Urteil*）から引いてこよう(西嶋 2008)：

(6) *Du denkst, du hast noch die Kraft, hierher zu kommen und hältst dich bloß zurück, weil du so willst.* (p. 58)

(6)' *You think you have strength enough to come over here and that you're only hanging back of your own accord.* (*The Judgment*, p.86 in translation)

(6)'' おまえは、じぶんにはここへ来る力がまだある、自制しているのは自分がそう望んでいるからだ、と思っている。（円子訳『判決』, p. 43）

2. 3. テクスト言語学的研究



2.3.2. カフカのテクスト分析

お見通し発言

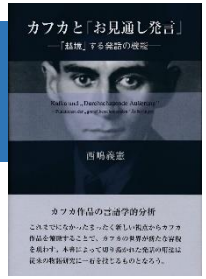
場面説明：

それまで耄碌して弱っていたはずの父親が突如として元気を取り戻し、息子との力関係が逆転し、息子よりも優位であることを誇示する場面である。息子から父親へと支配関係の転換がもたらされるという背景を考慮すると、この表現(6)は、相手に対して自らが優位であることを誇示する手段として利用されていると解釈することができる。

文(6)は、相手の思考内容をその本人に向かって断言しているが、このような断定的な発話は、通常、なされない。しかし、この作品の特定の場面では容認されうる。この発言により、話者の対話相手に対する支配力もしくは優位性を含意することになるからである。

このような発話を「お見通し発言」と呼ぶ。対話相手の思考内容を話者が見通していることを言明しているからである。

2. 3. テクスト言語学的研究



2.3.2. カフカのテクスト分析

「お見通し発言」の定義

「お見通し発言」は、形式的には以下のように定義される（Nishijima, 2005）。

(a) ２人称の *du* もしくは *Sie* (you) が主語となる;

(b) *denken* (think) や *glauben* (believe)といった思考動詞や *wollen* (will) が定動詞となる;

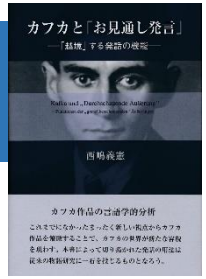
(c) 時制は現在形をとる;

(d) 平叙文形式をとる;

(e) *wahrscheinlich* (possibly), *vielleicht* (maybe), *wohl* (probably) といった心態詞は含まない。

このような文により、話者は対話相手の内面世界を断定的に言明する。

2. 3. テクスト言語学的研究



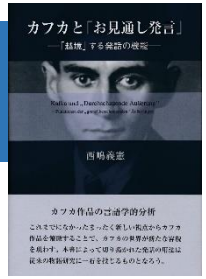
2.3.2. カフカのテクスト分析

仮説

　カフカ作品内の会話において、話者が対話相手の内面世界を見通していることを示すために、「お見通し発言」が意図的に、つまり、レトリカルに使用される場合、その機能の１つは、対話相手に対する話者の優位性を顕示することである。

　「お見通し発言」は、さらにそれ以外の機能を発揮することもある。「お見通し発言」は相手への深い理解を前提にしている。とするなら、たとえば、対話相手に対する話者の共感を示すこともあろう。対話相手の内面世界を理解するということは、優位性を提示するだけでなく、相手への共感を示すことにもなる可能性があるからだ。

2. 3. テクスト言語学的研究



2.3.2. カフカのテクスト分析

結果

「お見通し発言」は調査対象の 3 作品すべてにおいて確認できた：*Der Verschollene*（『失踪者』）は 5 例、*Der Proceß*（『訴訟（審判）』）は 8 例、*Das Schloß*（『城』）は 9 例。その機能は、対話相手に対して優位性や支配力を誇示するものだけではない。対話相手への共感を表わす例も認められた。したがって、「お見通し発言」はつぎの 2 つに分けられる：

1) 共感表明の機能を有する発話

2) 優位性表明の機能を有する発話

Der Verschollene（『失踪者』）では 1) が、*Der Proceß*（『審判（審判）』）と *Das Schloß*（『城』）では 2) が出現している。

そして、この分布は作品内容と相関関係にあることがわかる。

３．今後の研究計画

無職になる白髪の閑じじいは今後もボケ防止のために「研究」らしきことを続けていきたい：

3.1. 言語景観の研究対象の拡張

公共サイン以外のサイン（文字情報）

車ステッカー

「赤ちゃんが乗ってます」

「安全運転宣言車」など

ネームタグ

「研修中」「アルバイト」など

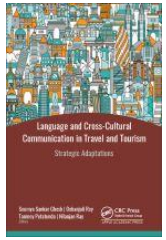
3.2. カフカのテクスト分析

局面を変える発言「唐突発言」

文献（社会言語学的研究）

“Controlling Communication in Japan and Germany”, Gisela Trommsdorff, Hans-Joachim Kornadt, and Carmen Schmidt (Hgg.): *Sozialer Wandel in Deutschland und Japan: 30 Jahre Deutsch-Japanische Gesellschaft für Sozialwissenschaften*. Lengerich: Pabst Science Publishers, 2021, 153-162. [Reprint of Nishijima (2007)]

“Passenger Identity in Public Transport Awareness Campaign Posters: Contrastive Study of Communication Styles in Japan and France.” (With Jungah Choi and Yui Kurihara), Soumya Sankar Ghosh, Debanjali Roy, Tanmoy Putatunda, and Nilanjan Ray (Eds.) *Language and Cross-Cultural Communication in Travel and Tourism: Strategic Adaptations*. Palm Bay: Apple Academic Press, forthcoming.



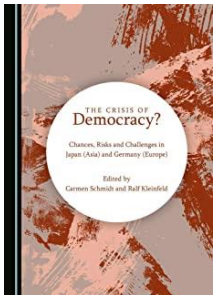
„Europäische Sprachenvielfalt und die Rolle der deutschen Sprache aus asiatischer Sicht“. In: R. Fischer (Hrsg.): *Herausforderung der Sprachenvielfalt in der Europäischen Union*. Baden-Baden: Nomos, 2007, 107-120.

「EUの言語政策とドイツの言語政策」, 野村真理・弁納才一 編『地域統合と人的移動 ―ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望―』, 御茶の水書房, 2006, p. 113-141.

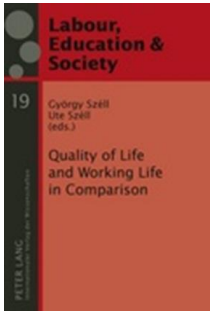
文献（語彙意味論的研究）

“Concepts of Communicative Virtues (CCV) in Japanese and German”(E)(Mit Ichiro MARUI / Kayoko NORO / Rudolf REINELT / Hitoshi YAMASHITA). In: M. Hellinger / U. Ammon(eds.): *Contrastive Sociolinguistics*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter, 1996, p. 385-409.

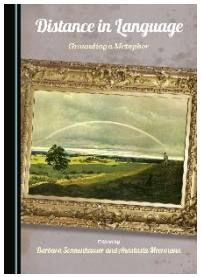
“Politeness in Young People: Changes in the Use of Evaluating Concepts of Communicative Behavior in Japanese and German and its relation to Democracy.” In: C. Schmidt & R. Kleinfeld (eds.): *The Crisis of Democracy? Chances, Risks and Challenges in Japan (Asia) and Germany (Europe).* Newcastle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing, 2020, p. 321-336.



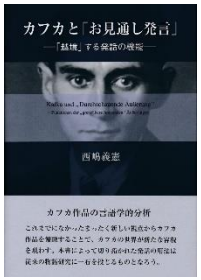
“Concepts of Labour-Related Words in German and Japanese: Comparing Lexical Semantics”. In: György Széll & Ute Széll (eds.): *Quality of Life and Working Life in Comparison*. Frankfurt/M. etc.: Peter Lang, 2009, 151-164.

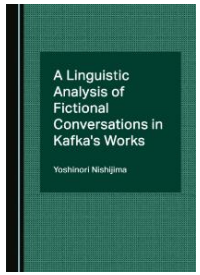


文献（テクスト言語学的研究）



“Ignorance of Epistemological Distance: Rhetorical Use of Non-evidentials in the Work of Franz Kafka.” In: B. Sonnenhauser & A. Meermann (eds.): *Distance in Language. Grounding a metaphor*. Newcastle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing, 2015, 167-186.



『カフカと「お見通し発言」—「越境」する発話の機能—』. 鳥影社, 2016.

A Linguistic Analysis of Fictional Conversations in Kafka’s Works. Newcastle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing, 2022.